

クラーク記念国際高校 ——芦屋キャンパスでの身体表現活動 における事例報告

総合教育研究財団 傅 正紅

1. はじめに

クラーク記念国際高校は広域通信制として1992年に開校となり、不登校を経験した生徒達や心に問題を抱えて人とコミュニケーションを取りにくい生徒達を積極的に受け入れ、一人ひとりに応じた教育課程を構築し、個性を伸ばさせる新しい形の高校教育を展開している。筆者は2006年から同じグループ内の非常勤講師として、幼児や小学生、また子ども達の親を対象に身体表現の指導を行ううちに、心身に何らかの問題を抱えた人達に対して、身体表現活動を通して心にある様々な感情をからだで表現させ、自己開示に導くことができるであろうかということを考えるようになった。そこで、2004年に行った中国人大学生対象の6回の身体表現に関する授業の結果と照合し、共通点と相違点を探るため、今年の5月からクラーク記念国際高校芦屋キャンパスで、体育の授業に身体表現活動を取り入れ、新たなトライアルを始めた。

2. クラーク記念国際高校芦屋キャンパスにおける体育授業の現状

- ① 1～3年生の生徒すべてが体育授業を受ける(週2回・50分×2回単位制)
- ② 設備が不足などのため、体育の内容を工夫し、指導要領に准じて球技と体力づくりを中心にを行っている。
- ③ 体力テストの結果によると生徒達の体力は基本的に弱い。

3. クラーク記念国際高校芦屋キャンパス身体表現活動の授業内容

1回目の流れ5/17 (50分)	2回目の流れ5/24 (50分)
導入「指ゲーム」「手リズム遊び」 ●叩く	ウォーミングアップ ●新聞紙
3回目の流れ5/31 (50分)	4回目のながれ6/7 (50分)
ウォーミングアップ ●名前を描く	ウォーミングアップ ●集まるー離れる

4. 対象

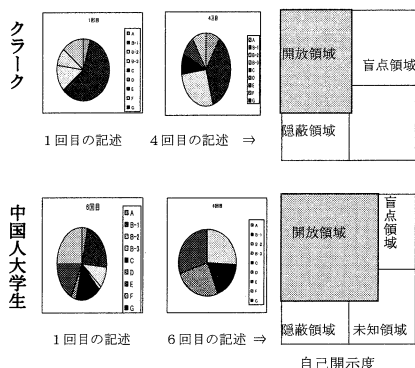
クラーク記念国際高校芦屋キャンパスでの高校2年生の4クラス男子59人、女子14人、全73人。

5. クラーク記念国際高校芦屋キャンパス生徒達の授業中の様子(授業記録からの観察)

初めての表現学習であり、最初は戸惑う生徒が

多かったが、回を重ねるごとに生徒達がそれぞれに持つ独特な表現方法でからだを動かし、表情や動きなどが少しずつ柔らかくなった。ほとんどの人がからだで動くことがやや不得手であるが、最後の回ではグループで感じあって動くことにもチャレンジし、積極的な姿勢が見られ、自信を持ちながらからだを大きく使って動くことができた。

6. クラーク芦屋キャンパスで4回授業の結果と中国人大学生6回授業の自由記述の比較



7. まとめ

クラークでの4回の授業と中国人大学生への6回の授業を比較した結果から、1回目の授業では不登校を経験した生徒や心の問題を抱えているクラークの生徒達にB-1(自己を中心にした記述)の記述が目立った。また、中国人大学生では4回目までにB-1の記述が無くなったが、クラークでは最後の授業まで、B-1の記述が続いた。不登校を経験する生徒や心の問題を抱えている生徒には身体表現のような活動(非言語的コミュニケーション)の中で自ら心を開放することに対して一般大学生より時間が必要だと考えられる。その一方、多くB-1(自己を中心にした記述)の記述が書かれていることはマイナスの点ばかりではなく、自分と他者の間を比較する意識を持ち、自分の方が物覚えがいいとか、からだ柔らかいとかを認識意識したのではないのでしょうか。その結果、それまで気付かなかった自分の一面を認識し、自分を社会的に認められたものと捉え始めた様子が窺える。また、授業記録(ビデオ)、1回目から最後の授業までの様子を観察した結果、からだで動く、からだで表現することによって中国人大学生とクラークの生徒たちに共通な効果が見られた。両方の参加者とも最後の授業中に1回目より、お互いの対人距離やアイコンタクト、話すときの表情など、接近ー回避傾向のバランスを保つことができるようになった。授業を受けた者が自己開示を通して内面性を変化させることによって、クラスメートとの親密度を調整することができるようになったことがわかった。